

コラム 緑化植物 ど・こ・ま・で・き・わ・め・る

ネコハギ (*Lespedeza pilosa* (Thunb.) Sieb. et Zucc.)

荒瀬輝夫 (信州大学農学部) tearase@shinshu-u.ac.jp



ネコハギは、「秋の七草」筆頭の萩 (ヤマハギ) と同じく、マメ科ハギ属の1種である。ハギ属で地上部がほふく性の生育を示すものは、本邦ではネコハギとハイメドハギ (メドハギの変種) に限られる^{3,5,6)}。花や実がないと同定の難しいハギ属の中でも、見た目ですぐに見分けることができる。

和名は同属のイヌハギと対をなすもので、イヌハギより毛が多いことが由来とされる⁵⁾。ほふく性の生育と、茎に開出軟毛が多いことから、一応「猫」らしい雰囲気はある。

日当たりの良い草地、道端などに生え、茎が細長い針金状に地上を這って1mくらいまで伸びる^{3,5,6)}。ただし著者の経験では、茎の長さは根元から数10cm程度のごとが多く、茎が地面に接していても発根はしないようである (埋めた場合に発根するのかについては未確認)。3出複葉の小葉は長さ1~2cm、倒卵形で先端が円頭~微凹頭となる。花は黄白色~白色で長さ7~8mm、花序が非常に短く^{3,5,6)}、葉腋に花が集まるように見えるため、あまり目立たない。また、正常な花のほかに、閉鎖花 (花弁がなく自家受粉する花) もつけ、閉鎖花のほうがよく結実するとされる⁵⁾。ハギ属では、莢が裂開して種子を弾き飛ばすというしくみを持たないので、種子散布は重力散布型であり (せいぜい、風や降雨で少しの距離を運ばれる程度)、散布距離は短い。親株のそばに種子が落ちるので、群落を形成、維持しやすいといえる。

図鑑類^{3,5,6)}では、本州、四国、九州と、朝鮮半島~中国に分布すると記載されているが、北海道 (道南の檜山郡上ノ国町) でも分布と開花が記録されている (北海道新聞 (日刊), 1994年9月9日記事)。ネコハギの分布の由来は、かつて日本列島が大陸と地続きであったころ、大陸から九州を経て本州にいたった「南まわり型分布」とされる⁷⁾。対照的に、同じハギ属でもヤマハギは、大陸から樺太や千島列島を経て北海道、本州に至る「北まわり分布」とされている⁷⁾。

ハギ属植物の種子は、休眠の一種である硬実 (種皮が硬くて水を通さないため、物理的に吸水できない) という性質が強く、種子の生存年限が5~10年と比較的長命である⁴⁾。種皮表面に傷をつけるか変質させるような処理 (サンドペーパーや刃物で傷つける、砂とともに容器に入れて震とうする、温湯に浸す、等々) をすれば、容易に発芽率を向上させることができる¹⁾。とくに東北地方で、山火事跡地でハギ属の

実生が多数生じ、低木林が発達することも知られている⁴⁾。大きな攪乱イベントのない状態に種子を放置したらどうなるかということ、おそらく寒暖や乾湿の変化を受けることにより、次第に硬実が打破されて少しずつ発芽するようである⁴⁾。すなわち、ハギ属の硬実種子は、空間的な散布能力は乏しいが、発芽する時期をずらし、時間的に子孫を散布しているとも解釈できる¹⁾。

ネコハギの種子についての発芽実験²⁾を行ったところ、対照区 (無処理) では発芽率が25℃で15%、15℃で10%であった。それに対し、傷つけ、低温湿層処理 (5℃・12日間)、温湯浸漬 (70℃・2分) では、発芽率は25℃でそれぞれ95%、91%、33%、15℃で90%、93%、3%であった²⁾。傷つけ処理の効果が高いことは当然であるが、低温湿層処理の効果が顕著であることと、温湯浸漬の効果が低かったことは特徴的である。低温湿層処理は種皮を傷つける処理ではないので、その効果の高さには、地面を這う茎に結実することと何らかの関連がありそうである。

ほふく性の多年草で、硬実打破も比較的容易であることから、草丈の低い草原植生を目標とする場合、ネコハギは有望なマメ科植物ではと期待される。

引用文献

- 1) 荒瀬輝夫・井上直人・丸山純孝 (1997) ヤマハギ (*Lespedeza bicolor* TURCZ.) の発芽率に及ぼす発芽条件と硬実打破処理の影響。日本緑化工学会誌, 23(2): 106-113.
- 2) 藤井望未 (2005) 権兵衛街道の面に自生するマメ科植物の緑化利用に関する研究—休眠打破と発芽について—。信州大学農学部森林科学科 専攻研究論文, 21 pp.
- 3) 北村四郎・村田源 (1961) 原色日本植物図鑑・草本編 (II)。保育社, 大阪, pp. 96-100.
- 4) 岩田悦行 (1964) 山火事跡地に発達する「ハギ山」について—北上山地植生の研究(2)—。岩手大学学芸学部研究年報, 23(3): 13-26.
- 5) 牧野富太郎 (小野幹雄・大場秀章・西田誠編) (2000) 新訂 牧野新日本植物図鑑。北隆館, 東京, p. 335.
- 6) 大井次三郎 (北川政夫改訂) (1983) 新日本植物誌 顕花編。至文堂, 東京, pp. 892-896.
- 7) 横内斎 (1976) 長野県植物分布の由来。信濃教育会出版部, 長野, pp. 50-115.



ネコハギの花

花は小さく、地面を這う茎葉の葉腋にたまってつくため、あまり目立たない。長野県上伊那郡箕輪町にて。



ネコハギの果実

這う茎を持ち上げたところ。ゴマ粒大の莢果が見える。長野県上伊那郡箕輪町にて。



ネコハギの生育状況 (1)

山城の城址公園，日当たりのよい芝地。
岐阜県瑞浪市にて。図中のスケール=10 cm。



ネコハギの生育状況 (2)

カラマツ林内の土場。カラマツ林の林床程度の遮光なら生育可能(?)。長野県上伊那郡箕輪町にて。



ネコハギの生育状況 (3)

国道4号線ぞい。緑地帯から歩道側にはみ出していた。
宮城県白石市にて。



ネコハギの植栽実験

初期生育では多少とも立ち上がるようである。
信州大学農学部構内にて。